

多義語分析についての一考察と教育的示唆 — 動詞drawを例として* —

林 田 朋 子**

An analysis of polysemy and its pedagogical implications:
A case study on the verb 'draw'

Tomoko HAYASHIDA**

キーワード：多義語、意味ネットワーク、語彙指導、スキーマ

1 はじめに

学習指導要領(2017)においては、コミュニケーション能力の向上を目的として、語彙習得に関しても、その量だけでなく質の向上が求められている。しかし、日本人英語学習者の語彙習得に関しては、中学高校で習う基本動詞であってもそれを十分に使いこなせていないことが指摘されている。その理由の一つとして考えられるのが、英語学習者と母語話者の多義語に関する知識のずれであると考えられている。今井(1993)は、母語話者は、多義語の意味構造に関する豊かな知識を経験の中で獲得しているが、英語学習者には母国語の語彙と外国語の語彙が一対一対応するという固定概念があり、様々な派生的意味を持つ多義語の意味理解は非常に限られた範囲にとどまっていることを指摘している。英語学習者の語彙の理解と定着を助けるためには、語学教師がこのような母語話者が持っている多義語に関する知識を理解することが必要であると考えられる。本稿は、認知言語学の観点から、多義語がもつ複数の意味の相互関係とそのカテゴリー構造を、多義語動詞drawを事例として明らかにすることを目的とする。

第2章では、多義語を認知意味論の観点から分析するための枠組みを設定する。第3章では、事例として動詞drawの多義構造を分析する。第4章では、多義構造の語彙指導への応用について言及する。第5章はまとめである。

2 多義語の認知意味論的分析の枠組み

2.1 多義語の複数の意味の相互関係

一つの語が複数の意味をもち、それらの意味が相互に関連付けられるものを多義語という(辻編

2013:217)。新しい事物や概念を表す際に、比喻などの認知的なシステムを介して、ある語を従来の意味とは異なる意味に用いることが繰り返された結果、その意味がその語の意味の一つとして定着し、複数の意味を持つようになったものと考えられる(靱山2002:95)。このような多義語をとりまく意味の相互関係を統括するモデルについては多くの研究がなされてきた(Brugman 1981; Lakoff 1987; Lindner 1982; Dewell 1994; Tyler and Evans 2001)。本稿では、多義語を分析する方法として、拡張とスキーマに基づくネットワーク・モデル(以下ネットワーク・モデル)(Langacker 1987, 1990, 1999)を採用する。以下では、このネットワーク・モデルについて、もう一つの有力なモデルである放射状カテゴリーを用いた意味構造分析(Lakoff 1987)との関連性から説明する。

2.2 放射状カテゴリー

多義語をとりまく意味の相互関係を統括するモデルの一つである「放射状カテゴリー」は、多義語を複数の意味全体が一つのカテゴリーをなすものであるとし、中心的な意味から周辺的な意味へと認知的な動機付けに基づいて多方向へと意味が拡張していくとするものである(Lakoff 1987)。このモデルにおいては、多義語の意味カテゴリーは重要性に優劣のある意味によって構成され、複数の意味の中で、最も典型的な特徴を備えたプロトタイプの意味を中心義とし、様々な認知的動機付けを経て周辺的な意味へと拡張することで放射状カテゴリーを形成するとされる。Lakoffの主張するプロトタイプを中心として形成される放射状カテゴリーは、必要十分条件の集合がすべての成員によって共有されることで規定されるとする古典的カテゴリー観が説明不可能であった現象を捉

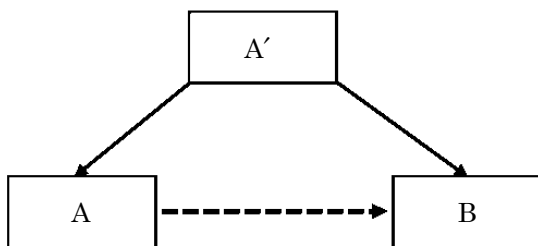
* Received December 3, 2018

** 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 外国語学科 Faculty of Contemporary Social Studies Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 850-0092, Japan

えることができたが、プロトタイプのみに基づいた意味ネットワークでは説明できない事象がある点が指摘された（早瀬2005）。これらの問題点を補うことができる多義構造モデルとして注目されたものがLangacker (1987, 1990, 1999) のネットワーク・モデルである。

2.3 拡張とスキーマに基づくネットワーク・モデル

ネットワーク・モデルを特徴づける概念であるスキーマとは「具体例とプロトタイプの双方と両立するような、細部の捨象と抽象化を行った結果得られる共通性のことである」（早瀬2005：71）。ネットワーク・モデル（Langacker 1987, 1990, 1999）によれば、プロトタイプからの意味拡張と具体事例からのスキーマの抽出の両方が多義構造の必要な要素であると考えられている。これは、人間に類似性を見つけ出してプロトタイプからの拡張を動機づける能力と、複数の具体事例から共通性（スキーマ）を抽出する能力が備わっているためであるとされる（Taylor 1995 辻幸夫訳1996：79）。ネットワーク・モデルにおいては典型事例であるものをプロトタイプとし、その他の事例はプロトタイプとの類似性に基づいてカテゴリーに属するものとされる。【図I】は、プロトタイプとスキーマの関係を示している。Aはプロトタイプであり、Bは現実に使用された具体的事例である。AとBとの間に十分な認知的な動機付けがあり、同じカテゴリーの成員とみなされた場合に、BはプロトタイプAの拡張例となり、AからBへの点線で示されている。A'は同時に抽出されたスキーマであり、AとBの両者に共通する要素を有し、A'からA、A'からBへの実線で表されている。つまり、プロトタイプAと拡張事例BはスキーマA'を事例化したものであると言える（辻2013：288）。¹



【図I】スキーマとプロトタイプの関係
（辻2013：288を参考にして筆者が作成）

2.4 プロトタイプの認定

多義語の中心的な意義であるプロトタイプの認定方法は意味論の一つの課題となっている（梶山・深田2003）。この点に関して、松本（2009）は中心的意義には「概念的中心性」と「機能的中心性」があると主張している。それによれば、「概念的中心性」とは言語話者の心的辞書の中で、周辺の意味の派生元となるような最も基本的な意味であり、「機能的中心性」とは、言語話者が伝達活動の際に最も頻繁にアクセスする意味であるとされている。「機能的中心性」の特徴に関してGries（2006）は、コーパスにおける使用頻度が中心的意義を認定する一つの基準であると述べている。松本（2009）はこれら二つの中心性が一致するときに、典型的な意味であるプロトタイプの意味であると考えられるが、必ずしも一致するとは限らないことを指摘している。つまり、典型的な中心的意味が存在しない場合や、言語話者により使用される頻度が低い意味が概念的中心性をもつ場合があるということである。中心性の特徴に関する記述には瀬戸（2007：4）があげられるが、ここでは「概念的中心性」と「機能的中心性」の2分類は行わず、中心的意味の特徴として次のものを提示している。

- (i) 文字通りの意味である
- (ii) 関連するほかの意味を理解する上での前提となる
- (iii) 具体性を持つ
- (iv) 認知されやすい
- (v) 想起されやすい
- (vi) 用法上の制約を受けにくい
- (vii) 意味展開の起点となる
- (viii) 言語習得の早い段階で獲得される
- (ix) 使用頻度が高い

瀬戸（2007：4）は、これらの中心的意味の特性について、全てを備えている必要はないとしており、「(ix) 使用頻度が高い」という特性に関しては、必ずしも高頻度で使用されることが中心性の要件になるわけではないことを述べている。また、松本（2009）は「(viii) 言語習得の早い段階で獲得される」という特徴づけについては、論理的根拠の弱さを指摘しており、その理由として、子供の多義語の複数の意味の習得順序については、習得初期の段階での意味理解と大人の意味理解とは異なっていることから、習得基準をどの

時期にするかにより習得の順序が異なる場合がある点をあげている。これらの議論から、本稿では、瀬戸（2007：4）の提案する中心性の特徴をできるだけ多く持つ意義を中心的意義であるとしながらも、使用頻度や習得順序に関しては優先性の低い要件であるとみなすことにする。

2.5 意味の拡張を支える比喩の働き

これまでの研究によれば、ネットワーク・モデルにおける、多義語のもつ複数の意味の拡張には、人間に本来備わっている認知能力を基盤とする比喩の力が働いていると考えられている。瀬戸（2007：5）は多義語における派生的意味を生じさせるメカニズムとして、物と物が類似するという認識に基づくメタファー、物と物が世界の中で隣接するという認識を基盤とするメトニミー、類と種の関係であり、より大きなカテゴリーがより小さなカテゴリーを包摂するという認識を基礎とするシネクドキ、という3種類の比喩が重要な役割を果たしているとしている。次節では、本稿の事例研究に関連するメタファーとメトニミーについて概観する。

2.5.1 メタファー

抽象的でわかりにくい対象と具体的でわかりやすいものの間に類似性を見出す概念的な仕組みがメタファーである（山添2017：7）。認知言語学におけるメタファーの包括的な研究としてはLakoff & Johnson (1980) があげられる。そこで彼らは、ある概念を別の概念との関連づけにより理解するという概念メタファーを介した意味の拡張を提示した。メタファーの分類は、異なる観点により様々な方法があるが、「構造のメタファー」、「方向づけのメタファー」、「存在のメタファー」などが有力である。吉村（2004）はこれらの概念メタファーを次のように説明している。「構造のメタファー」とは、例えば、〈議論〉を〈議論は戦いである〉という概念によって理解し、「議論を戦わせる」などの日常表現を生み出す認知プロセスであり、「方向づけのメタファー」とは、例えば「気分が上がる」などの表現に見られるように、「楽しい気持ちは上、悲しい気持ちは下」というメタファーによって、気分の状態を概念化することであるとした。また、「存在のメタファー」とは、抽象的なものを具象物に置き換えて理解を容易にする認知現象であり、例えば「知力は機械である」という概念メタファーにより、「頭がさび

ついて回転しない」などの表現が可能となる。一方、瀬戸（2007：5）は、メタファーを支える類似性に着目し、[形態類似]、[特性類似]、[機能類似]の3種類に下位分類しており、次のように説明している。まず、「形態類似のメタファー」とはneckの多義にみられるように、「(人・動物などの)首」から「(瓶などの)首」に意義展開するメタファーである。また、「特性類似のメタファー」とは、ある一つの意味特性が別の意味の特性と似ている場合に適用され、具体例としては、英語形容詞emptyの「〈入れ物が〉空の」と「〈人生が〉空の」のように、「空の」という特性が両者の間で類似しているという場合があげられている。「機能類似のメタファー」とは、例えば、英語動詞attackの「〈人・場所を〉激しく攻撃する」と「〈考え・思想を〉激しく攻撃する」の意義関係にみられるように、働き・作用の類似に基づく意義展開パターンである（瀬戸2007：5）。本稿では、これらの様々なメタファーを意味拡張の動機付けの一つとして考える。

2.5.2 メトニミー

多義語の複数の意味を関連づける三つの比喩の中で、もっとも複雑な展開をするものがメトニミーである。メトニミーとは「二つの事物の外界における隣接性、さらに広く二つの事物・概念の思考内・概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩」（靱山2002）である。すなわち、メトニミーは隣接関係にある二つの事物間における指示のずれによっておこる、参照点能力²⁾に基づく認識方法であると考えられている（Langacker 1999）。瀬戸（2007：7）は、メトニミーを意味の観点から、空間的隣接関係に基づいて意味が派生する「空間のメトニミー」、時間軸上での出来事の順序に基づいて意義展開する「時間のメトニミー」、人や物の特性とそれを備えた人や物の隣接関係によって意味転義・拡張を行う「特性のメトニミー」の3種類に分類している。メトニミーはその特徴に応じて更に細分化することができるが³⁾、多くのメトニミーは、隣接関係に基づき生じるずれによって実際に指示される箇所である活性領域（アクティブ・ゾーン）と、認知的際立ちの大きい参照点との関係に一般化することができる（吉村2004）。

次章では、メタファーとメトニミーを意味の拡張基盤とし、拡張とスキーマに基づくネットワー

ク・モデルによる事例研究として、動詞drawの多義語分析を行う。

3 動詞drawの多義語分析

3.1 動詞drawのスキーマとプロトタイプの認定

辞書記述をもとに動詞drawの複数の意義を確認する。本稿では代表的な辞書のひとつである『ウィズダム英和辞典第3版』（井上・赤野編2013）を参照した。紙面の都合上、次の意義に限定して分析を行う。

【表1】動詞drawの複数の意味

<ul style="list-style-type: none"> ・線を引く ・(鉛筆などで) 絵をかく ・区別・比較のための線を引く、一線を引く ・人や物をゆっくり引く、引き寄せる ・顔を引きつらせる・しかめる ・人を引きつける ・人の気持ちを引く ・人目を引く、人気を呼ぶ ・(名詞) 〈人の気持ちや注意などを引くもの〉 ・(引き寄せられるように) 近づく・寄り集まる ・時や時期が近づく ・試合を引き分ける ・(名詞) 引き分け ・容器・集合体などから取り出す ・お茶のエキスを引きだす・茶を煎じる ・(人から) 解釈・着想・反応を引き出す (得る)
--

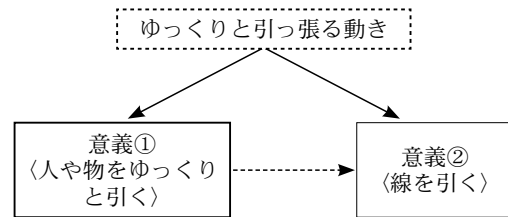
まず、【表1】の複数の意義の中からプロトタイプの意義を先に述べた中心性の特徴(i)～(ix)(瀬戸2007)を用いて認定する。動詞drawのプロトタイプの意義を考えると、認知的際立ちの高い意義として、〈人や物をゆっくりと引く〉と〈線を引く〉の二つが考えられる。これらを意義①〈人や物をゆっくりと引く〉と意義②〈線を引く〉とする。どちらも文脈なしで想起されやすく、身体性・具体性が高い。母語話者による使用頻度を示すコーパス検索の結果【表2】をみると、具体的意味で高頻度で用いられているdrawの意義は、〈線を引く〉(draw line, draw lines)であることがわかる。しかし、関連するほかの意味を理解する上での前提となり、意味展開の起点となるという典型性の特徴を重視すれば、意義①〈人や物をゆっくりと引く〉をプロトタイプの意味と認定し、意義②〈線を引く〉は意義①との類似性から意義拡張されたものであると考えることが妥当である。したがって、動詞drawのプロトタイプは意義①〈人や物をゆっくりと引く〉であると

する。意義①と意義②の多義構造は【図II】で示されており、意義①と②は、共通性である〈ゆっくりと引っ張る動き〉をスキーマとして抽出していると考えられる。次節では、drawのプロトタイプの意味とスキーマの関係を説明する。

【表2】母語話者による動詞drawの使用状況⁴

共起語	トークン頻度
① ATTENTION	4409
② LINE	2474
③ CONCLUSIONS	1262
④ BREATH	1161
⑤ PEOPLE	949
⑥ LINES	698
⑦ BLOOD	629
⑧ PICTURE	488
⑨ CRITICISM	472
⑩ CROWDS	428

出典：Corpus of Contemporary American Englishの検索結果を基に筆者が作成

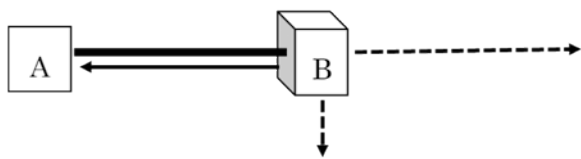


【図II】drawのプロトタイプとスキーマ

3.2 drawのスキーマ

拡張とスキーマに基づくネットワーク・モデルによれば、プロトタイプからの意味拡張は、カテゴリーに属する複数の意味の一部またはすべてに共通する特徴を有するスキーマ抽出を伴う(靱山2003)。意義①〈ゆっくりと引っ張る〉と意義②〈線を引く〉の共通性として抽出されたdrawのスキーマである「ゆっくりと引っ張る動き」を見てみよう。drawの類義語にはpull, draw, dragなどがあり、【図III】が示すように、どの動詞もBを動作主であるA側に引く行為を意味する。drawとpullを比較した場合、pullの方がBからAへの引く力が強く、また引っ張る時間も短い。dragは地面との摩擦が大きいという点で、引きずるように移動させるという点がdrawやpullと異なる。このように、動詞drawやその類義語である動詞pullなどは、概念化者の頭の中に蓄積された自然界における重力や抗力などの物理的な力の関係を含め

た背景的な知識を前提として、「引っ張る」力加減や、様態が異なる動きをそれぞれ表しているものと考えられる。このような物理的な力関係は破線で示している。本稿で事例分析の対象とするdrawは、AがBをゆっくりと平均的な速度で、軽く滑らかに引く動きを表し、動詞dragと比較すると、地面との摩擦による大きな抵抗などは想定されないことから、BからAへの引く力加減もそれほど大きなものではないと考えられる。このような、自然界における力の作用に関する母語話者の既存の知識がスキーマを支え、動詞drawの意味拡張にも大きく作用しているものと考えられる。



【図Ⅲ】動詞drawのスキーマ

3.3 drawの多義構造

drawの多義構造を明らかにするため、それぞれの意義の拡張関係を見ていく。なお、共時的な母語話者による動詞drawの使用実態を反映させるため、例文はCorpus of Contemporary American English (COCA) の検索結果を用いた。日本語の訳は筆者が行った。

意義①プロトタイプ：〈人や物をゆっくり引く〉

drawの中心的な意義は、人や物をゆっくりと引っ張ることで、意図する方向へ移動させることを意味する。スキーマである「ゆっくりと引っ張る動き」が事例化されており、引っ張るといふ力の作用によって、引っ張られる対象が物理的な移動を伴う。(1)は椅子を、(2)は人をゆっくりと引っ張ることで、動作主の側へと引き寄せている。

(1) …without giving him a chance to offer her a seat, she **drew** up the nearest chair.

(彼が彼女に椅子に座ることを申し出る隙もあたえず、自分で近くの椅子を引き寄せた。)

(2) The mayor **drew** Davy aside and whispered, …

(市長はデビーを脇へ連れて行ってささやいた。)

意義①-1：〈顔を引きつらせる・しかめる〉

意義①〈人や物をゆっくりと引く〉からのメタファーを介した意義拡張である。引っ張る動作主は顔の中心部分であり、行為を受ける対象である

周辺の筋肉をひっぱるイメージの類似性に基づくメタファーを介した意味拡張であると考えられる。(3)のdrawn face の名詞face (顔) は、全体で部分のメトニミーを介して「顔の筋肉」に意味拡張している。

(3) Aidan dragged his gaze back to the cop's **drawn face**.

(エイデンは再び警官のこわばった顔を渋々見た。)

意義①-2：〈人を引きつける〉

行為主体の内在的な要素が原因となって物理的に人や集団を引きつけることを意味する。意義①からの意味拡張である。物や人の魅力は「磁力・引力」であるという、概念メタファーを介した意味拡張であると考えられる。(4)は、ボストンマラソンというイベントが世界中から人々を磁石のように引き付ける魅力のあるイベントであることを意味している。

(4) The Boston Marathon is an international event that **draws people** from around the world.

(ボストンマラソンは世界中から人々を引き寄せる国際的な催しだ。)

意義①-2-1：〈人の気持ちを引く〉

物理的な物から抽象的なものへ「特性類似のメタファー」を介して意義①-2が意味拡張している。注意 (Attention)、批判 (Criticism)、不平 (Complain) など、抽象的でとらえることがきないものである心理的なものを行為主体が自分の領域内に引きこみ移動させていることから、「感情は移動物である」という概念メタファーが働いていると考える。例文(5)は連邦政府が自らの方向へ批判を引き寄せていることから、「批判を招く」状況を意味している。例文(6)は、前置詞句to what's happening in the black communityが表す、「意図する方向」へと「注目を移動させる」ことから、「～に注目を集める」という意味に意義拡張している。

(5) The federal response continues to **draw criticism** from locals.

(連邦政府の返答は地元の住民からの批判を招き続けている。)

(6) I'm trying to **draw attention** to what's happening in the black community.

(私は、アフリカ系アメリカ人のコミュニティーで起こっていることに注目を集めようとした。)

意義①-2-2 〈人目を引く、人気を呼ぶ〉

意義①-2 〈人を引きつける〉からの意味拡張であり、〈引き寄せる〉というプロセスではなく、引き寄せた結果である〈人気を呼ぶ〉という意義に焦点が当てられている。〈全体で部分〉の「時間のメトニミー」による意味拡張である。drawの目的語であるpeopleが省略されており、通常wellなどの副詞を伴って用いられる。

(7) Baseball doesn't **draw well** during the day, so night games are much preferred.

(野球は昼間はあまり人気がないので、ナイトゲームのほうがずっと好まれる。)

意義①-2-3：(名詞)

〈人の気持ちや注意などを引くもの〉

意義①-2 〈人を引きつける〉からの意味拡張であり、人の気持ちや注意を引く原因となるもので、「プロセスで原因のメトニミー」を介した意味拡張である。「人の気持ちを引くもの」が場所の「魅力」という意味に転義している。

(8) The **draw of the neighborhood** is its proximity to the Galleria and the Highland Village Shopping Center.

(この近隣の魅力はギャレリアとハイランド・ショッピングセンターに近いことである。)

意義①-3

〈(引き寄せられるように) 近づく・寄り集まる〉

【図Ⅲ】におけるBが引き寄せられることによって、Bがある対象に結果として近づく、または寄り集まることを意味する。原因で結果の「時間のメトニミー」を介しての意味拡張である。例文(9)は、電車がゆっくりと引っ張られて駅の方へ移動するという事象の中で、「電車がゆっくりと停車する」という部分に焦点が当てられている。

(9) As the train **drew** to a stop inside the station, he leaned toward her.

(電車が駅の中にゆっくりと停車しようとしたとき、彼は彼女のほうへ身を寄せた。)

意義①-3-1 〈時や時期が近づく〉

【図Ⅲ】におけるBがAへと引き寄せられる物理的な移動のイメージが時間の経過に写像されており、「空間と時間のメタファー」を介した意義①-3からの意味拡張である。例文(10)は、物理的な物の移動を、クリスマスという抽象的な時間の移動に写像している。

(10) As **Christmas drew near**, Jessica's mom looked very worried.

(クリスマスが近づいてくるにつれて、ジェシカの母はひどく心配そうに見えた。)

意義①-4 〈試合を引き分ける〉

【図Ⅲ】のAとBが綱引きのように引っ張り合う状況を起点領域として、目標領域である数や優劣を競うスポーツで勝敗が決まらない状態を写像しているメタファーを介した意味拡張である。

(11) The U.S. men began well, earning a 2-2 **draw against** the Czechs on Wednesday.

(アメリカは滑り出し好調で、水曜日には2対2でチェコに引き分けた。)

意義①-4-1 (名詞) 〈引き分け〉

意義①-4が「プロセスで原因のメトニミー」を介して意味拡張し名詞化している。

(12) Upset that the previous Flash vs Superman race ended in a **draw**.

(前回のフラッシュ対スーパーマンの対決が引き分けに終わったことには動揺した。)

意義② 〈線を引く〉：ペンや鉛筆などで細長く延長した連続体を描くこと

意義②は次の例文のようにペンなどの道具を使い、細長く延長した連続体を描くことである。スキーマが事例化されており、意義①〈人や物をゆっくりと引っばる〉がプロセスで結果を表すメトニミーを介して意味拡張しており、手でペンを引くことにより、ペンが滑らかに動き、線状の連続体を紙などの媒体に視覚的に記録していく様態を表している。COCAからの例文(12)は子育て雑誌の工作コーナーからの引用である。子供は言語習得過程初期に「線を引く」ことを遊びの中で多く経験することから、draw lineが子供にとって視覚情報を伴ったイメージとして蓄積されていくことで、習得過程初期の子供の心的辞書の中では、「線を引く」がプロトタイプ的な位置を占めるのではないかと考えられる。

(13) **Draw** line around cereal box that's 3 inches from bottom.

(底から3インチの、シリアル箱の周りに線を引いてください。)

意義②-1：〈絵をかく〉：(鉛筆などで) 絵をかく
意義② 〈線を引く〉という行為を参照点として、

隣接関係にある〈絵をかく〉行為へと意味がずれている。「線を引く」で「絵をかく」というプロセスの中で結果に焦点をあてたメトニミーを介した意味拡張である。

- (14) If you asked any third-grader to **draw** a picture of a scientist, most of them will draw a white man with curly hair and glasses.
 (もし小学3年生に科学者の絵をかくように言えば、ほとんどの生徒が、パーマヘアの眼鏡をかけた白人男性を描くだろう。)

意義②-2: 〈区別・比較のための線を引く〉: 線を引く

意義②〈線を引く〉の「機能類似のメタファー」による意味拡張である。「線を引く」ことで、異なる領域を区別して比較することができ、領域間の違いを明確にすることを意味する。例文(14)では、遺伝子改変をどこまで行っていいのかという「判断の境界線を引く」ことをメタファーを介して表現している。

- (15) Where should we **draw a line** with gene editing? -- don't have scientific answers.
 (遺伝子改変について、どこに制限を設けるべきであろうか..科学的な答えは見つかっていない。)

意義③: 〈容器・集合体などから取り出す〉

スキーマの〈ゆっくりと引っ張る動き〉がスキーマの変換により、【図Ⅲ】におけるBが容器・集合体に内包される形で事例化されており、容器の中からBを引き出すという行為を伴っている。意義①の〈人や物をゆっくりと引っ張る〉がメトニミーを介して意味拡張している。例文(15)はbattery(電池)、例文(16)はaccount(口座)がメタファーを介して引き出すものが入っている容器となっており、それぞれ、liquid(液体)、funds(資金)を容器の中から引き出している。

- (16) Henry watched the man **draw liquid** from the battery.
 (ヘンリーは男が電池から液体を抜き出すのを見た。)
- (17) You're authorized to **draw funds** from the Henickstein account for your own use, no questions asked.
 (あなたは何も質問されることなく、個人利用の目的でヘニックスタインの口座から資金を引き出す権限があります。)

意義③-1〈お茶のエキスを引き出す・茶を煎じる〉

お茶(コーヒー)とそのエキスが全体と部分のメトニミーの関係にあり、意義③からの意味拡張である。例文(18)は、熱い湯を沸かし、コーヒー豆に注ぐことでコーヒーのエキスを「引き出す」ことを意味する。

- (18) She **drew another cup of coffee**, passed it to him.
 (彼女はコーヒーを淹れて、彼に渡した。)

意義③-2 〈(人から) 解釈・着想・反応を引き出す(得る)〉

意義③からの意味拡張であり、中から取り出すものが具体的な物から、inspiration(創作・思考の過程でのひらめき)などの抽象的なものへとメタファーを介して意味拡張している。例文(18)はinspirationがThe Beatlesという容器に入っていると見立てる「容器のメタファー」を介している。

- (19) [he] He **drew inspiration** from The Beatles, ...
 (彼はビートルズからインスピレーションを受けた。)

3.4 英語drawの意味ネットワーク

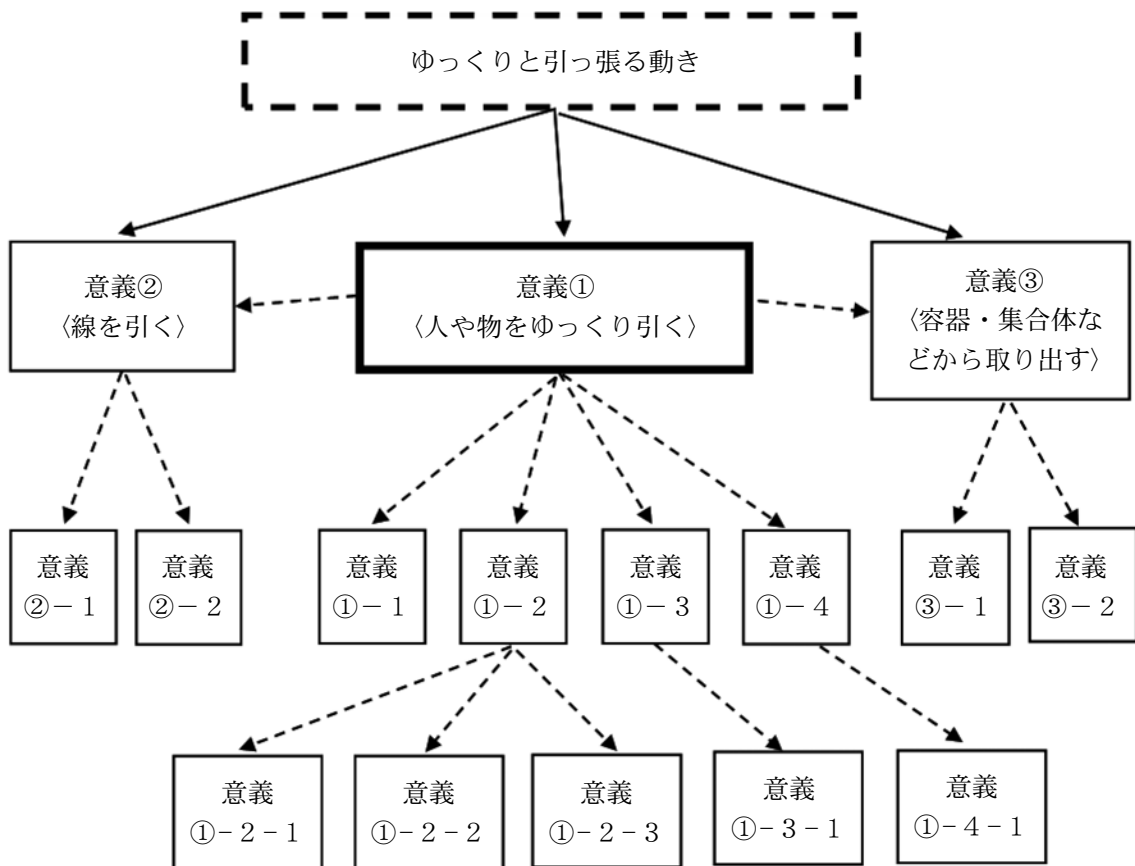
第3節では、動詞drawの複数の意味からプロトタイプ的意味を認定し、スキーマを抽出したうえで、複数の意義の関係を認知的基盤に基づく意味拡張として観察した。本節では複数の意味が構築するネットワークに焦点をあてる。【表3】は意義間の関係をリスト化したものである。これらの複数の意義関係のネットワークを図式化したものが【図Ⅳ】である。【図Ⅳ】は動詞drawの複数の意義が、カテゴリー化関係に基いてネットワークを形成していることを示している。[A]→[B]の実線の矢印は[A]が[B]のスキーマであることを示し、[A]↔[B]の破線の矢印は[B]が[A]の拡張であることを表している。前述のように、意義①〈人や物をゆっくりと引く〉という意味が、動詞drawのプロトタイプ的意味であると考えられる。意義②〈線を引く〉や意義③〈容器・集合体などから取り出す〉は、言語使用の経験の中で意義①から意味拡張しており、また抽象化された共通性を示すスキーマ(破線枠)である〈ゆっくりと引っ張る動き〉を抽出している。【図Ⅳ】は動詞drawが、具体的意義から抽象的意義へとメタファーやメトニミーを介して意義を拡張させ、階層的な意味のネットワークを形成していることを示している。

【表3】

意義①プロトタイプ〈人や物をゆっくり引く〉
 意義①-1: 〈顔を引きつらせる・しかめる〉
 意義①-2: 〈人を引きつける〉
 意義①-2-1: 〈人の気持ちを引く〉
 意義①-2-2: 〈人目を引く、人気を呼ぶ〉
 意義①-2-3: 〈(名詞) 人の気持ちや注意などを引くもの〉
 意義①-3: 〈(引き寄せられるように) 近づく・寄り集まる〉
 意義①-3-1: 〈時や時期が近づく〉
 意義①-4: 〈試合を引き分ける〉
 意義①-4-1: 〈(名詞) 引き分け〉

意義②: 〈線を引く〉: ペンや鉛筆などで細長く延長した連続体を描くこと
 意義②-1: 〈絵をかく〉: (鉛筆などで) 絵をかく
 意義②-2: 〈区別・比較のための線を引く〉: 一線を引く

意義③ 〈容器・集合体などから取り出す〉
 意義③-1: 〈お茶のエキスを引きだす・茶を煎じる〉
 意義③-2: 〈(人から) 解釈・着想・反応を引き出す (得る)〉



【図IV】 drawの意味ネットワーク

4 教育的示唆

第3章では、動詞drawに着目しその多義構造を明らかにした。母語話者は、分析結果が示唆するような多義語の複数の意味が相互に関連し合うことで構築された意味カテゴリーに関する知識を様々な経験の中で培っているものと思われる。今井(1993)が指摘するように、多義語を使いこなすことが英語を外国語として学ぶ学習者にとって難しい理由の一つは、このような多義語に関する知識が欠如しているためであると考えられる。このような問題に対応するため、近年、認知言語学の理論を語彙学習や語彙指導に応用する方法が研究されている。メタファーを含む多義語の拡張原理の理解が語彙の運用能力に影響を与えること(Azuma 2005)や、多義語の意味拡張に関する知識を含む語彙の質的側面を重視する必要性がとらえられている(Littlemore 2009)。また、田中他(2006)は、全ての具体的事例との共通性を持つ抽象的概念をコア・ミーニングと称し、語彙指導や語彙学習に応用することを提案している。このように、多義構造に関する知識は学習者の語彙習得を促進するものであると考えられる。本稿で取り扱った動詞drawの事例においては、イラストや例文を用いてスキーマである「ゆっくりと引く動き」を経験的に導き出すような活動を、語彙指導に取り入れることが考えられるだろう。今後は、多義構造の概念を活用した効果的な語彙指導について研究することを課題としたい。

5 結語

本稿では、ネットワーク・モデルを用いて動詞drawを事例とした多義語分析を行った。スキーマやプロトタイプ、drawの複数の意味の相互関係を、認知能力を基盤とした比喩のメカニズムを用いて明らかにし、その多義構造を意味のネットワークとして提示した。drawの中心的意義の認定や拡張関係については更なる議論が必要であると考えられる。また、多義構造を活用した語彙指導については、更なる検証を行うことを今後の課題としたい。

参考文献

Azuma, M. (2005). *Metaphorical competence in an EFL context*. Tokyo: Toshindo
 Gries, StefanTh. (2006). *Corpus-based methods and cognitive semantics: the many meanings*

of to run. *Corpora in Cognitive Linguistics: Corpus-based Approaches to Syntax and Lexis*. Ed. by Stefan Th. Gries and Anatol Stefanowitsch. Berlin: Mouton de Gruyter, 57-99

Lakoff, G. (1987). *Women, fire, and dangerous things: What categories reveal about the mind*. Chicago: University of Chicago Press.

Langacker, R. W. (1987). *Foundations of cognitive grammar I, Theoretical prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.

Langacker, R. W. (1990). *Concept, image, and symbol: The cognitive basis of grammar*. New York: Mouton de Gruyter.

Langacker, R. W. (1999). *Grammar and conceptualization*. Berlin, New York: Mouton de Gruyter.181

Littlemore, J. (2009). *Applying cognitive linguistics to second language learning and teaching*. Basingstoke: Palgrave MacMillan

Taylor, J. R. (1995). *Linguistic categorization (2nd ed.)*. Oxford: Oxford University Press.

Taylor, J. R. (2002). *Cognitive grammar*. Oxford: Oxford University Press.

井上永幸・赤野一郎編 (2013)『ウィズダム英和辞書第3版』三省堂

今井むつみ (1993)「外国語学習者の語彙学習における問題点—言葉の意味表象の見地から—」『教育心理学研究』41、pp.245-253

ジョン・テイラー (1995) 辻幸夫訳 (1996)『認知言語学のための14章』紀伊国屋書店

瀬戸賢一編 (2007)『英語多義ネットワーク辞典』小学館

田中茂範・佐藤芳明・阿部一 (2006)『英語感覚が身につく実践的指導』東京：大修館書店

辻幸夫 (2003)『認知言語学への招待』東京：大修館書店

辻幸夫編 (2013)『新編認知言語学キーワード辞典』東京：研究社

投野由紀夫 (2007)『日本人中高生一万人の英語コーパス—中高生が書く英文の実態とその分析』小学館

早瀬尚子・堀田優子 (2005)『認知文法の新展開カテゴリー化と用法基盤モデル』研究社

松本曜 (2009)「多義語における中心的意味とその典型性—概念的の中心性と機能的中心性—」『Sophia linguistica』57号、pp.89-99、上智大

学国際言語情報研究所

靱山陽介 (2002) 町田健編 『認知意味論のしくみ』
研究社

靱山陽介 (2003) 「多義性」 松本曜編 (2003) 『認
知意味論』 大修館書店

山添秀剛 (2017) 「第3章 多義のざわめき」 瀬
戸賢一・山添秀剛・小田希望 『認知言語学演習
2 解いて学ぶ認知意味論』 大修館書店

吉村公宏 (2004) 『はじめての認知言語学』 研究
社

学習指導要領

文部科学省 (2017) 『中学校学習指導要領』

オンラインコーパス

Corpus of Contemporary America, BYU corpora,
<https://corpus.byu.edu/coca/> (最終閲覧日2018
年11月18日)

-
- ¹ 靱山 (2003:169) は、かならずしも明白なプロトタイプや、すべての意味に共通するスキーマが存在するとは限らないことを指摘しており、スキーマは「カテゴリーのすべてのメンバーあるいは一部のメンバーに適合する抽象的な意味である」と定義づけている。また、プロトタイプが複数存在する場合や、通時的なプロトタイプの変容もありうるという点も考慮する必要があると指摘されている (早瀬2005:39)。
 - ² 認知的な際立ちが小さい構造にアクセスすることが難しい場合に、認知的際立ちの大きい別の関連した構造を経由して目的の概念構造にたどり着く行為を可能にする人間の基本的な認知能力を参照点能力と呼ぶ (辻編 2013)
 - ³ 瀬戸 (2007:6) を参照。
 - ⁴ COCAをもちいて動詞drawのレマ [draw] を右3語以内でコロケーション検索した結果10位までを示したものである。